



TITLE:

<Book Review>Nguyen Thai, Is South Vietnam Viable? Manila, 1962,xii+314p.

AUTHOR(S):

中野, 寿一郎

CITATION:

中野, 寿一郎. <Book Review>Nguyen Thai, Is South Vietnam Viable? Manila, 1962,xii+314p.. 東南アジア研究 1965, 3(1): 161-162

ISSUE DATE:

1965-06

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/55032>

RIGHT:

職員・学生・教育、(5) 言語、(6) 調査。

ところで、東南アジアの大学の過半数は、第二次大戦後に設立されたものであり、特に最近、高等教育就学者の量的増加率は、めざましい。この高等教育の驚異的發展の原因を、著者は、(1) 戦前における中等教育の発達、(2) 日本軍の進軍に伴い教育の重要性を高く評価したこと、(3) 新興独立国が教育費への支出を大幅に認めたことなどに求めている。

とくに、第二章では、ビルマ、タイ、カンボジア、ヴェトナム、ホンコン、フィリピン、インドネシア、マラヤおよびシンガポールにおける諸大学の概要を紹介的に述べている。第五章の言語問題については、母国語の台頭を指摘している。すなわち、過去は、教授用語として、英語・フランス語・オランダ語・タイ語の四ヶ国語であり、宗教教育面において、パーリー語・アラビヤ語・ラテン語が使用されていたに過ぎなかった。ところが、現在では、オランダ語が衰退した反面、ビルマ語・クメール語・ヴェトナム語・シナ語・マレー語が、抬頭してきている。

本書の論旨は、東南アジアの諸大学が、欧米先進国の制度の単なる模倣であってはならず、あくまでも東南アジア独自の文化的土壌に適合した教育制度を確立することにあると思われる。

なにはともあれ、本書は、啓蒙的、示唆的なものを多分に含んでいるのみならず、類書の稀少性からも、好個な労作たりうると信ずる。(門前貞三)

F. M. LeBar and others; *Ethnic Groups of Mainland Southeast Asia*. HRAF Press, New Haven, 1964, x+288 p.

本書は Human Relation Area Files に所属する LeBar 博士を中心に G. C. Hickey, J. K. Musgrave 両氏のほか何人かの専門家が協力して、G. P. Murdock 的方法論にもとずいて執筆され、編集されたものである。

南中国、インドのアッサム地方、東パキスタンのチッタゴン丘陵地帯、ビルマ、タイ、ラオス、カンボジア、ヴェトナム、マレーシア（マレー半島）にわたる現在までに出版された数多くの論文や書籍、さらにそれら各国で仕事をしたフィールド・ワーカーとの文通などにより集積された資料を基礎に作成された本である。

内容を大別すると、第一部 Sino-Tibetan, 第二部 Austroasiatics, 第三部 Tai-Kadai, 第四部 Malayo-Polynesian に分かれていて、各部はさらに細かく分類されている。扱われている民族集団は約 156 にもおよび、おのこの社会・文化について触れている。

断片的な資料を古今東西の文献から採集して、このような形で集大成した編者たちの努力はたいへんなものであったと思われる。また同時に HRAF にも見られるようなアメリカにおける文献利用の組織能力には驚嘆せざるをえない。このような豊かな資料にくわえて文献目録や美しい色ずりの大型民族分布図はたいへんに親切なものであり、役に立つ。すでにその民族分布図はタイ国政府の山地民関係の出先機関では利用を始めている。端的にいうとこの本は大陸部東南アジアの民族に関する百科辞典的性格を持つものといえよう。

しかしながら、編者や筆者が複数なうえに、断片的な資料を文献から集成したために、内容的にはいささか不統一のきらいがある。それに百科辞典的な書物が持つ無味乾燥な傾向はさげがたいようである。そのため、できのよい民族誌を読んでいるように通読して面白いというたぐいの本ではない。また引用文献が英語に片よっているのも将来是正されなければならないであろう。

以上のような問題はあるにせよ、主任編集者の LeBar 博士は意欲的に現在おこなわれている東南アジアにおけるフィールド・ワークの成果をさらに取り入れ、何年か先には本書の改訂版を出すことを希望していると述べているので、この本がやがて大陸部東南アジアの民族誌の“決定版”として成長してゆくことが期待できる。その意味で、本書がこのような形で出版されたことは意義深いといえよう。この種の地味な仕事に取り組まれた編集者たちに敬意を表したいと思う。

いずれにせよ本書が人類学者をはじめとする東南アジアの地域研究者にはたいへんに便利で有益な本であることは間違いはない。とりわけ研究室には不可欠の本であろう。(飯島 茂)

Nguyen Thai: *Is South Vietnam Viable?* Manila, 1962. xii+314 p.

南ベトナムの情勢は、ここ数年表面的にはいくつかの大きな変化を示した。けれども、国際政治の Sub-

system としての問題の性質や国内の諸底流は、それにも拘らず、根深い連続性を保っている。この Nguyen Thai の著作は、特に Ngo dinh Diem 政権への批判として書かれたものであるが、南ベトナム社会の内蔵する基本的な諸問題に対する理解への示唆をもっていると考えるので、ここに紹介することにした。ちなみに、著者は1954年以来 Vietnam Press (official news agency) 政権にあっての総支配人などを務め、1961年末この政権に見切りをつけて米国に亡命した。

本書は六つの章から構成されており、第一章では著者の基本的命題である「南ベトナムの政治的危機は行政的リーダーシップの問題である」という点が定式化される。かれはいい切っている：南ベトナムでは、政府と人民の関係こそが米国の援助によって支援された反共産主義戦略プログラムの成功あるいは失敗を決定するであろう、と。〈Diemocracy〉のもっている問題は internal かつ domestic なものでその administrative leadership の失敗が政治的危機の根源であると理解するのである。

行政上の問題の一半は、しかし、伝統的・植民地的社会の官僚制や行政組織の望まれざる遺産であるし、加えて戦時という特殊事情の結果でもある。この分析が第2章のテーマである。patronage, nepotism, corruption, opportunism が行政組織に浸透し、技術的・行政的堕落を招く一方、有能な人材を一致して政府に動員することに失敗し、大衆の支持は失われる。

第3章から第5章までの三章は専ら Ngo dinh Diem 体制の解剖に当てられている。そこでは清廉潔白で情熱的な nationalist leader である Diem の権力への抬頭とその体制が示したいくつかの矛盾が明らかにされる。著者は、〈成功的な民族的・革命的指導者が必ずしも有能な行政家ではない〉という仮説を検証しようとしている。第3章では、Diem 体制の ideology とその実践が、第4章では、〈聖家族〉のメンバー達の分析が、そして第5章ではそういう支配のもたらした行政的破綻が指摘される。この三つの章は、量の上からも全体の2/3を占め、著者の特殊な立場も手伝って Diem 政権の内側からの鋭い分析になっている。特に第4章は〈The Invisible Government〉この種のものとしては記録的な価値をもっているといえよう。

第6章は結論の項であるが、全編の分析が基本的にはそうであったように、アメリカ型の組織論——leg-

itimacy vs. effectiveness——の西洋的合理性に溺れ過ぎてはいないかという懸念が残る。従って Diem 体制の分析評価は今少し、根深い社会の底流から行なわれるべきであるという気もする。その点で、この書の情報的要素をより高く買っておく。(中野寿一郎)

Frances A. Bernath: *Catalogue of Thai Language Holdings in the Cornell University Libraries through 1964*. [Data Paper: Number 54] Southeast Asia Program, Department of Asian Studies. Cornell University, Ithaca, New York, 1964. v + 236p.

祝儀・不祝儀の「引出物刊行物」、すなわち「Nangsū Čhaek」が、タイにおける過去の serious な出版物中の重要な部分を占めて来たという事実は、これ迄意外な程に人の注意を引かなかった。「Nangsū Čhaek」とは文字通り「配る (Čhaek) 書物 (Nangsū)」であって、それが印刷される因縁となった何かの儀式——たとえば葬儀、加寿の祝儀、記念式典など——に偶々列席しその頒布を受けた者以外の目に触れる機会は誠に少なく、一般にはその出版の事実すら知られぬままに死蔵され遂には散佚してしまう場合が多かったものと思われる。「Nangsū Čhaek」が一般読書人の物となり得る現在ほとんど唯一とも言える場所はバンコクの王宮前広場 (Sanam Luang) の一隅に列をなす街頭大書店の Kiosk である。足まめに根気よく Sanam Luang へ通うことがタイの出版界の消息通となるための必要条件である理由はここに存する。今日までタイ語図書の出版目録が殆ど現われなかった原因、4921点の文献蒐集に前後十数年を費し、その目録が未整理のままでさえ優に Data Paper の一巻を飾る価値のある理由はタイの出版事情のかかる特殊性を背景に理解される必要があろう。

Lauriston Sharp, William Gedney 両教授の協力で始められた。Cornell 大学のタイ語文献の組織的蒐集事業が、同大学図書館の手に引継がれ今日も着実に進められているということは聞き及んでいたが、本書の出現によってその蒐集の全貌が公にされたことはタイ研究の進歩のため誠に喜ぶべきことである。幾多の困難を克服し先駆的なタイ語文献の蒐集事業をここまで育て上げた関係者の努力にあらためて敬意を表